

佐伯史談

第五十六号

「郷土史研究」誌
通算六十八号

昭和四十四年九月二十日

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字橋垣字龍蓮寺羽柴方

研究

故郷ものがたり

— 山田俊卿先生と心学 —

山田平之丞

(佐伯市共中區・米水津村出身)

俊卿先生愛謡の道歌

聞きての又始めて知りぬ人の道
仁義土常をふかくまもらん

好き嫌らふ富と貧と力深は
積むと散らすハ二つなりけり

仰き見の富士の高嶺の元とへば
土と石とのあつまいるなり

ふへ鏡うつしても見ぬ目無鳥
うづさぬ跡に一物もなし

夢の世に夢に夢見し夢人の
夢物語するも夢なり

おのが目力に見ると思ふなり
月ハ光に月をを見るなり

奥山に夜泊るしハの浮雲の
かゝる時に年月を見るらん

おのが氣に人は添
はぬと人の氣に

我から添ふ
て導きをせ
よ

まがりたる人の心
とがめず

己が誠を出
して使へよ

親の身に替りて我
身はなかりけり
かかろ人を
ば言行とせり

水子内家

故郷ものがたり (山田平之丞) —
— 山田俊卿先生と心学 —

一 天の龍馬大長寺物語 (龍馬伝と志) …… 三
二 佐伯教育の権威時代 (山田武藏) …… 六
三 さかみかくらウヤラ踊り (歌水舞) …… 九
四 続「西南」後と愚沢 (山本保) …… 二二
五 佐伯藩の殿様 (佐藤寛) …… 二二
六 佐伯の港はどんな物語をしてゐるか
葛港 (市野源仁) …… 二八
七 大野郎を歩く (高木まき吉) …… 三二
八 佐伯商標文代紙の公示 (伊賀金雄) …… 三三
九 集會案内・贊助案内・会費紹介
一〇 正誤・編集後記 …… 三三

君の必はなりて我身はなかりけり
かかる人をば 忠臣といふ

我と云ふちいさき此身捨てて見よ
大千世界さばる者なし

打つ人も打左る人も諸共に
唯一時の夢ノ古はむれ

高殿もほにふの小座も住む人
萬き賤しき心にぞよる

生れ得し本心を知る目かに
こ水ぞ怪りといふものなし

道は只あるべきにおるが道
柳はみどり 花はくれない

道といふ其名に迷ふことなかり
朝夕おのがなす業としれ

迷ふとはいかなるものと思ふたが
身につかはうが迷なりけり

本心の徳は元よりうまれつき
我處も孔子もおなじ人なり

神儒仏 三つの教も外ならず
心一つと廢くばかりぞ

(註) 道歌といふ心学の訓を三十一文字によらるもの

山田俊卿先生、幼名嘉治郎、長けて俊策、後俊卿。可
耕と號す。天保二年七月廿五日豊後國海部郡米水津宮野
浦の漁家に生る。祖父善右衛門文字あり、村闈の子女に
読書算と教ふ。嘉治郎亦ついで学ぶ。穎悟衆をぬく。善
右衛門その大成を期し、家と興すに日医にしくなすと、
佐伯藩蘭医三江元節の門に入らしむ。時に天保十三年先
生年十二。爾未刻吾精勵、學業大に達み備筆をぬき、士
籍に列し、師家の匠業を掌す、明治維新となるや各地に
学を諸地に奉じ、名声々々にあらむ。後軍醫に投じ、
軍医として軍隊医術の發達に力をつくし、明治十九年退
後す。

俊卿先生また心学知世の道と研究して其の解讀を極む。
振業治療の傍て教を四方に布き、九十萬令に至るま
で一日も寧んぜず。其の振世清民の熱誠は著して後多の
社会的施設となり、國家の福利に貢獻することす。ここに
大なるものがあつた。

心学とは如何なる學問であるか。近世文學の復興は漢
學から始まつたのであるが、天保の頃になると漢學は次
第に宋學の傾向をとり、一般學問の興隆と精神の作興と
に寄與することが非常に多くなつた。ここに石田梅巖は
和漢仏の説をまじえた心学をおこして、人心の教化に力
り出した。心学の源祖は前述の通り石田梅巖、大正六年
贈正五位。その説くところ天池の公道にもとづき、また
人情の微細にもよくふれていた。そして心学の書もよく
出ていた。「鳩翁道話」など私も読んだことがある。そ
の「鳩翁道話」の一節

貧乏金持によらず、女は夫の家にかしげば先方の

親をちと我親としてつかへる道じや。其大切を舅姑御は御病氣入るときに急かき花おすび、茶花夜では御介抱は出来ませぬ。出入ノ按摩やをなご衆せからず嫁御が真実親だちの肩こしとまですすりして御介抱なさるが、嫁御の道でござります。其道ノ修行に按摩ノ御醫古はま左か申したのてあります。とかく役に立つ御醫古が肝要じやといはれました。

「風が吹けば桶屋が喜ぶ」と心学道話にいつている。「風が吹けば砂ほこりがたつ。それが眼にはいつて眼をわすらう者が多く、盲目がふえる。ごぜが多くなるので三味線がどんどん売れる。三味線ノ皮がふるため猫がこみされて猫がへる。猫がへると鼠がふえる。ふえお鼠が桶をかじるめで、いさんで桶屋にもつていく。桶屋は商売繁昌で大喜び。」

人は孤独にあらず、世はすべてに関連ありである。明治の幸田露伴の「天うつ波」に、

あゝ世は綱よ、われはそれノ網の一目ぞ、我が家
 のいわし焼くときに、とやりの梅に香りをなく、とな
 リの稚児をなくときに、我が酒まづく味もなし。
 (ちと語句に記憶ちがいがあるかもしれん)

ある人、あるもの持ちに金を左むる秘訣をきいた。こ
 れで井戸の水をくんでんをさい、とよいつるべと底ぬけ
 の桶をくいた。なんぼくんで水がたまらぬ。じやこれ
 でわけてみなさいと、かえてくれば桶は立派だがつ
 るべは破れてゐる。しかしだんだんやつてゐるうちに、
 水がたまりだした。大金をもうけてもパツパツかつた
 らたまるところではない。千チンもうけてもつづま

くつかつていたら、塵もつもつて山となる。これは心学
 道話の訓である。

この盆前、俊卿先生ノ嘗派に在る芳子刀自、夫君竹
 中第一先生と宮野浦にお出でになられた、おほおほ七の
 身とを訪ひ、私ノ茅舎におこし下された。
 竹中先生は近畿大学の教授で、心学と経済学的に研究
 されて経済学博士ノ学位をとられてゐる方である。

大正十年五月八日、俊卿先生逝く。齡九十一。
 先生は御土々生んで大偉人である。戦前官立小学校ノ職
 員室には、先生ノ肖像がかかけられていた。借問す、其
 ノ写真、今なお健在なりや。

戦争にまけてから、日本人は国家や御土ノ偉人と忘れ
 ている。それはまだしも、教育勅語をけいべつし、毛沢
 東語録を讀む若者が多い。

戸穴ノ高林伝男先生が、宮野浦生れでもあらうか、先
 生が私にあらう左様に山田俊卿先生の事をおけかけいわれ
 る。かきますかきます、といえどまじかかん。こらえて
 下さい。
 (以上)

隨録

天の網島大長寺物語

一 秀吉と矢筈毛利

大阪 馳川 比 志

天正十四年——十四年ぶりに近畿の山河は、森備前守
 定春を迎えた。山容水姿は昔ながらの條を存していたが、